

## 都市化と都市問題

参考資料：『新詳地理B 初訂版』p.283-296、『高等学校 新地理A 初訂版』p.150-153、  
『新詳 資料地理の研究』p.172-175、『新詳地理資料 COMPLETE 2011』p.214-217

### I 世界の都市化と都市問題

目的・ねらい

都市人口の割合が1980～2010年の30年間で、国によってどのように変化したか比べてみよう。そしてなぜそのような変化の差があるのか考えてみよう。※都市人口率とはその国の総人口に対する都市居住人口の比率のことである。

作業1 表1の「人口率の変化」の欄に人口率の増加ポイント〔(2010年の数値) - (1980年の数値)〕を計算して記入しよう。また、図1に増加ポイントが20ポイント以上の国を赤で、20ポイント未満の国を青で着色しよう。

表1 各国の都市人口率の変化 (%)

	1980年	2010年	人口率の変化 (2010年-1980年)
日本	60	67	7
中国	19	47	
インドネシア	22	44	
インド	23	30	
アルジェリア	44	67	
ガーナ	31	52	
ボツワナ	17	61	
ナイジェリア	29	50	
イギリス	79	80	
フランス	73	85	
ロシア	70	73	
アメリカ合衆国	74	82	
メキシコ	66	78	
アルゼンチン	83	92	
ブラジル	66	87	
オーストラリア	86	89	

図1



目的・ねらいについてのあなたの考えをかいてみよう。

### II 発展途上国と都市問題

目的・ねらい

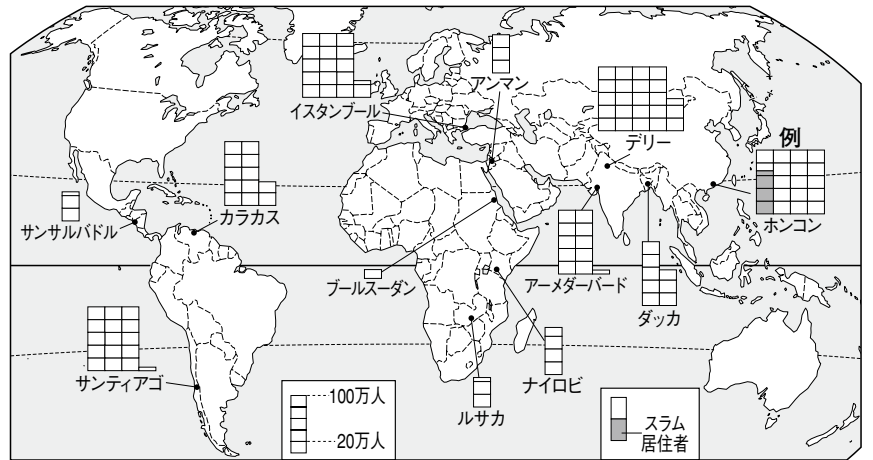
発展途上国の大都市には、なぜスラムが多いのか、考えてみよう。

作業2 表2を見て、図2中のグラフのスラム居住者数を例を参考に、赤で着色してみよう。

表2 スラム居住者数 (万人)

ホンコン	例 68	デリー	162	ダッカ	78
アーメダーバード	56	アンマン	10	イスタンブール	130
ブルースーダン	7	ナイロビ	25	ルサカ	23
カラカス	100	サンティアゴ	61	サンサルバドル	24

図2 大都市のスラム居住者



目的・ねらいについてのあなたの考えをかいてみよう。

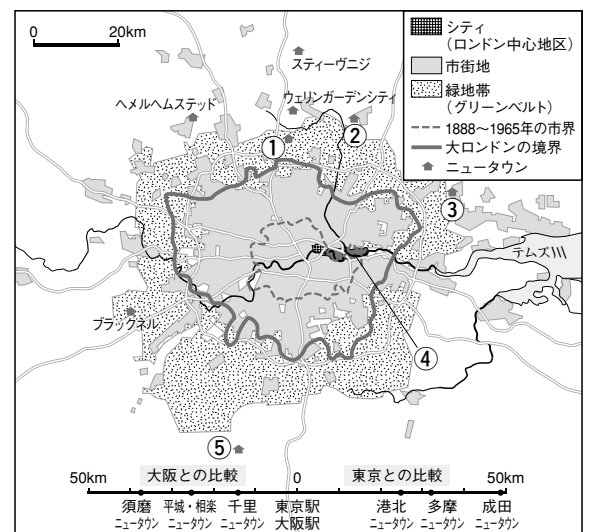
### III 先進国における都市化・都市問題

目的・ねらい

イギリスや日本ではなぜニュータウンが必要だったのか、それ以前に発生していた都市問題について考えてみよう。

作業3 図3は、大ロンドン計画について表したものである。緑地帯(グリーンベルト)を緑で着色しよう。また、図中の①～⑤にあたる地名をそれぞれ次の( )から選んで、記入しよう。  
(ドックランズ、ハーロー、ハットフィールド、クローリー、バジルドン)

図3 大ロンドン計画



①	②
③	④
⑤	

目的・ねらいについてのあなたの考えをかいてみよう。

**都市化と都市問題 解説・解答**

参考資料：『新詳地理B 初訂版』p.283-296、『高等学校 新地理A 初訂版』p.150-153、  
『新詳 資料地理の研究』p.172-175、『新詳地理資料 COMPLETE 2011』p.214-217

**I 世界の都市化と都市問題**

世界の都市問題は、発展途上国と先進国とでその特徴に大きな違いがある。それぞれの大都市を比較すると、発展途上国では都市への人口の集中とスラム（スラム街）の拡大がポイントとなる。先進国ではインナーシティ問題とジェントリフィケーションがみられる。いずれも、都市というものが生き物のように常に変化するために起きる問題である。

**II 発展途上国の都市化・都市問題**

第二次世界大戦後、発展途上国の農村部において変化が現れた。医療の進歩と衛生環境（上下水道）の改善、農産物生産量の増加等により人口爆発が起こった。そのため農村の人口に余剰が出て、豊かさや雇用を求めて大都市に人口移動が始まった。そこで大きな問題が発生した。都市型インフラストラクチャー（上下水道・電気・道路などの社会資本、以下インフラ）の未整備と工業の未発達、そしてそこに起因するスラムの形成である。

これらの問題は、大都市に急激に人口が流入するために発生する。発展途上国の首都など大都市では、官公庁や大企業本社、大使館などが集まる都心部でインフラが整備されている。しかし人口の過度な流入のため、その周辺地域ではインフラ整備が追いつかない。なかでも住宅建設が不十分のため、土地をもたない流入者が河川敷や傾斜地、居住に適さない公有地、土地所有が不明確な空き地にバ

ラック（小屋）を建て不法に居住するようになる。そのため治安や衛生状態が悪く、犯罪や伝染病の温床となる。警察や役所など行政は、進んで介入ができないためスラムは拡大している。これらのスラムは南アメリカのリオデジャネイロ（ブラジル）ではファベラ、カラカス（ベネズエラ）ではランチョとよばれている。マニラ（フィリピン）ではかつてスモーカーマウンテンという地区が有名であった。

スラムに流入する人々は、十分な教育を受けておらず、工業化が進んでいない発展途上国の都市ではそれらの労働力を吸収する雇用もないため、不定期な日雇い労働や路上での物売り、ごみ捨て場で売れる物を探すなどのインフォーマルセクターによって生計を立てる低所得層になっている。スラムに居住している人々は、行政による保護も規制も受けず、公式には数字に表れない。

**III 先進国における都市人口の増加とその要因**

先進国では18世紀後半から始まる産業革命と第二次世界大戦後の工業化により大都市に人口が集中した。そのため19世紀、イギリスの首都ロンドンなどで住環境の悪化が目立っていた。そこで1898年イギリスの都市計画家ハワードが「田園都市構想」を発表した。これは大都市の郊外に住宅と工場を一体化した都市を建設して、大都市の環境悪化を改善し労働者の職住近接を図るものであった。さら

にロンドンの過密化を防ぐために1944年市街地の開発を規制し、その外側に緑地帯（グリーンベルト）の設置、さらにニュータウンを建設するといった「大ロンドン計画」が発表された。これによりロンドン周辺にはニュータウンが8都市建設された。そのため1960年にはロンドンの人口が80万ほど減少した。

さらに50年ほど経ち、ロンドンの市街地では、新たに「インナーシティ問題」が生じている。これは、先進国の大都市において、「老朽化した市街地の住宅地から新しい住宅地を求めて富裕層が郊外に移転する→そこに低所得層である貧困層や低開発国からの移民、外国人労働者が移住することで、スラムが形成される→治安の悪化や失業者の増加、商店街の衰退、都市税収の減少」という順に発生する。

そのため、先進国ではスラムを一掃してオフィスや高層住宅を建設する再開発が始まった。このように市街地が再び高級化する現象は「ジェントリフィケーション」とよばれる。その代表格であるロンドンのドックランズ（Docklands）はテムズ川沿いにあり、かつては造船業で栄えた。20世紀初頭には60万を超えた人口も、造船業の衰退で14万まで減少し、住環境も悪化した。そこで1981年からイギリス政府による再開発が行われて、新交通システムや地下鉄の延長などによる交通網の整備がなされ、古いドックや倉庫がホテルやオフィスビルに変わった。フランスのパリでも同じようにラ・デファンス地区の再開発が行われた。

**IV 日本の都市化・都市問題**

日本では第二次世界大戦後、1960年代後半に起こった高度経済成長で、東京を中心とし

た首都圏・大阪圏・名古屋圏などに工場が集積した。そのため工場労働者が、農山村から大量に移動したが、雇用が十分にあるためスラムなども発生せず、大都市ではニュータウンが建設された。日本のニュータウンはイギリスと異なり、公団、鉄道会社や不動産会社により住宅地として開発された職住分離のものであった。

東京西部にある多摩ニュータウンは、1966年から開発が進められた。八王子市など4市にまたがり、多摩丘陵とよばれる台地のうち約3000haが住宅地に変わった。計画人口34万であったが、2010年には19万に減少している。これは最初の入居者に対する子の世代の入居率が低くなったことと少子高齢化が急速に進んだためである。そのため地域コミュニティが希薄になったり、小中学校が統廃合されたりしている。

大都市圏ではドーナツ化現象と、その周辺ではスプロール現象が発生している。ドーナツ化現象とは、大都市の都心部で地価高騰や環境悪化に伴い、人口が減少するものである。これに対して東京などでは1990年代以降、都心部の再開発により高層マンションができるなど、人々の回帰現象がみられる。一方スプロール現象とは、大都市の中心部における地価高騰から地価の安い都市周辺部に住宅や工場が移転し、無秩序に農地や山林が開発され、工場や住宅地が混在化し住みづらい状況になっていることをいう。

**■ 解答 ■**  
作業 省略

目的・ねらい 解説 II 発展途上国の都市化・都市問題、III 先進国における都市人口の増加とその要因 参照